

中国5県絶景の旅⑤

岡山県岡山市・吉備津神社

—— 桃太郎伝説発祥の吉備国一宮

子供心に、不思議に思っていたことがある。「備後庄原駅」の名前である。「備後(びんご)」というのは何だろうか。古い地名であることは想像していたが、何故そう呼ばれるのかは知らないまま上京、四十代半ばで帰郷したときも同じである。

本誌の企画で芸備線の駅を

レポートするようになって、備後と名の付く駅が多いことにあらためて気づいた。そして、備中神代駅の「備中(びつちゅう)」である。そういえば、備前焼で有名な「備前」という呼び名もある。それで調べてみて、古代に吉備という地方国家が存在したことを知った。ウィキペディアの記事によると、吉備国は大和、筑紫、出雲な

どと並んで、古代日本の四大王国の一角だった。現在の岡山県全域と、広島県東部、香川県島嶼部、兵庫県西部にまたがる広大な領地を有していたらしい。

分国は持統天皇3年(689年)

で、備前・備中・備後に分割、大和朝廷による中央集権国家が成立した後での政策で、地方豪族の勢力を分断する目的もあったと推測される。大和に近い方から備前・備中・備後、さらに20数年後に備前国から内陸部の美作(みまさか)が分立した。筑紫国は筑前と筑後に分けられ、越(古志)国は、吉備と同じく越前・越中・越後に三

分割された。

かつての吉備国の末裔の一人として、国の中心地であったであろう場所を訪問してみたい。それが吉備津神社なのである。

6月15日曜日、8時半頃、車で庄原市の自宅を出た。すぐに庄原インターチェンジから中国縦貫道に入り、北房ジャンクションで岡山自動車道を南下、岡山総社インターチェンジで高速を降りた。それから吉備津神社まで15分余り。途中、休憩を入れながらも、庄原から2時間半のドライブだった。高速料金が土日・祝日割引で30パーセント引きなのがあった。

自宅を出るときには小雨が降っていたのだが、岡山自動車道を走っているときは日差しが漏れてきた。吉備津神社の駐車場に入った時は、青い空が広がっていた。さすがは晴れの国である。駐車場は入口でセンサーが車両番号を記憶、退出する前に精算機で支払いを済ませてから出口に向かうというシステムで、これだと出入り口で渋滞することがない。

駐車場に隣接する場所に、犬養毅の大きな銅像が聳えている。解説板によると、犬養毅元総理の生家は吉備津神社の近くにあり、遠祖が犬養健命(いぬかいたけるのみこと)で、桃太郎伝説の起源となった吉備津彦命の温羅(うら、



吉備津神社の拝殿。本殿と共に国宝に指定されている



本宮社に続く回廊は総延長約400メートル



岩山宮の斜面には約 1500 株の紫陽花が植えられている



吉備津彦神社は備前国一宮として吉備津神社から分祀された

拝殿から回廊をしばらく歩くと、岩山宮の鳥居がある。回廊の外に出て、鳥居の下をくぐって参道を登ると、紫陽花の園である。斜面いっぱい約1500株の紫陽花が植えら

れている。この時期を選んだのは、紫陽花を見るのが目的だったのだが、少し時期が早かったようだ。吉備津神社の「アジサイまつり」は6月22日〜23日で、その日は梅雨の中休みの猛暑で、紫陽花の花も元気がなかった。

その後、境内や周辺を散策したあとで、吉備津彦神社に向かった。歩いても30分ぐらい。吉備津神社と吉備津彦神社、こんなに近い場所に、どうして同じ祭神の社が存在するのか？ 分国したからである。吉備津神社は備前国の一宮、吉備津彦神社は備前国の一宮として吉備津神社から分祀された。ちなみに、備後国の一宮である吉備津神社は広島県福山市にある。

吉備津彦神社は備前国なので、狛犬が備前焼で出来ている。石像よりもリアルである。拝殿でお参りして、白桃みくじを引いた。小さな桃の陶器におみくじが入って500円、「中吉」に満足。吉備津神社と吉備津彦神社、どちらか一方に参拝することを「片参り」と言い、両方にお参りすればご利益が増すという。さすが福山の吉備津神社に……、欲張るとロクなことはないが、いずれは行ってみたいと思う。



おんら）征伐に随行。吉備津彦命を祭神として祀る吉備津神社への尊崇の想いは深く、神社のために尽瘁（じんすい）したという。

温羅征伐に随行したのは三人。犬養健命は猟犬の飼育を担う犬養部、楽々森彦命（ささきもりひこのみこと）は猿養部、留玉臣命（とめたまおみのみこと）は鳥養部、これが桃太郎伝説の犬、猿、雉（キジ）のモデルになった、という説がある。

ちなみに温羅についても諸説ある。鬼ノ城を拠点とした鬼で、巨体で怪力無双の暴れ者……、だから吉備津彦命に討伐命令が出たのだが、ユニークなのは温羅が百済の王子だったと

書かれた文献があること。朝鮮半島の百済が高句麗によって滅ぼされて、日本に逃げて来た。しかし、日本と百済は白村江で共に戦った同盟国である。その亡国の王子を鬼として成敗してしまふのはあまりにも惨い。古の時代から、朝鮮半島との関りは複雑だったのだろうか。

吉備津彦命の本当の名前は彦五十狭芹彦命（ひこいさせりひこのみこと）、温羅の討伐も含めて吉備国を平定したから吉備津彦命と呼ばれるようになった。しかし、吉備津の「津」は何だろう。本来は港を意味する漢字である。山の麓にある神社に「津」が入るのはおかしいではないか。

いろいろ調べて、「都市と日本人」（上田篤著、岩波新書）の「吉備の穴海」という文章にたどり着いた。「縄文・弥生、そして古墳時代ごろまでは、現在の岡山市と倉敷市の大半は海だった。

本土と、その南にあった『吉備の児島』という小豆島よりも大きな島に囲まれた内海だったのである。」

歴史の旅はこれぐらいにして、参拝しよう。献灯の提灯に囲まれた石段を登って北随神門をくぐり、石壁の参道を進み授与所の門をくぐると拝殿の前に出る。日曜日なので、外国の観光客の姿も目に付く。順番を待って、二拝二拍手一

「雄橋図」
おんばし

高柴順紀（菊栽培農家）

帝釈の雄橋も大変である。隣村の相渡（あいど）の人たちは橋がないのに相渡村、雄橋があるのに未渡（みど）村としているのはけしからん、何かの間違いじゃと言ったとか。とにかく昔から天然の石橋ではあった

が、日常使われており、多くの文人達もその奇観を文や句にしてきたのですから。

話は飛びますが丁度今、NHKで「べらぼう」をやっています。出てくる老中、松平定信が雄橋をビジュアル的に人々に知らせるきつかけを作ったのです。というのは、定信は期待されて老中になりましたが人気が出ず、短期間で老中を辞して白河藩主になると、水を得た魚のごとく本領を發揮しました。学者殿様として後世に名を遺す事業をしたのです。それは各地の神社仏閣はもちろん、個人所有の貴重な古物の今でいう文化財調査を行い、木版図録『集古十種』を発刊しました。



「備後国未渡村虹橋」（「定信と画僧白雲」より転載）

現在でも重要な資料として認められています。精密な模写の木版画を作るためには絵師がいります。そこで定信は地元白河藩に住む画僧、白

雲和尚を中心メンバーにして各地を歩かせたのです。白雲和尚は調査で歩く途中の景観も、画家らしく絵にしています。

その中に「備後未渡邑石橋図」があり、精密なスケッチを当時は真景図と言いましたが、当時のありのままの雄橋が描かれていると思われま。橋の上は樹木に覆われ、二人の旅人が下から見ている姿が描かれています。旅人は中国地方などを担当した二人の絵師、白雲と大野文泉が自分たちの姿をサインがわりに入れているのかもしれませんが。日付が九月十七日としてありますが、寛政十一年（1799）で、この時は倉敷の下津井から岡山城、そして高梁川に沿って九月九日広瀬村（高梁市）、十日山根村（新見市）、山を越えて十一日には小柳村（江府町）で伯耆大山をスケッチしています。そして米子から南下して未渡の雄橋に来たのが十七日というわけです。絵の中に日付があるのも記録資料として重要です。この雄橋の真景図は彩色して画冊にしてありますが、そこでは名前を虹橋としています。

これは文政八年（1825）に完成しているので白雲図の二十六年後ですが、橋を道として強調したのか樹木はあまり描いてなく、これでは恐ろしくて渡れません。でも茶店も歩く人も描いてはあります。ここで橋の状況が良くわかる京都の俳人蝶夢の出雲紀行文を紹介します。安永八年（1779）で白雲より二十年も前です。

「谷を分け山を歩き五里かほと行くと九折れする所を下れば谷川あり、その上にわたしたる岩橋なり。聞きしより見るはまさりて、その橋おのつからの岩をわたせるにて、人工の跡あらず。高き事五丈余、巾六間、全長十五く六間、上に草木生えてただ坂道を行く心地なり。」

江戸時代に描かれた雄橋図は今のところこの二点しか知らない。しかし神橋図にも旅人が二人描いてあるのが気になってしょうがない。

《参考文献》

「定信と画僧白雲―集古十種の旅と風景―」（白河市歴史民俗資料館）
「天然記念物雄橋緊急報告書」（庄原市教育委員会）

ハロー注意報⑬

——進駐軍がいた町のはなし

白衣の傷痍軍人

松岡初枝

私の家族は東京へ出かけることが多かった。祖父は北区赤羽の出身なので、祖父の生家のあった赤羽には祖父の姉や従兄弟が住んでいたり、菩提寺や墓があるので、盆の施餓鬼や彼岸の墓参りなどに連れて行かれた。私は盆の施餓鬼の寺でのお説教を聴くのが好きで、今思うとちよつとおませな子供だった。地獄や極楽

の絵図を広げた本堂での僧侶のお説教が何とも興味深かったのだ。弟たちはじっと目を瞑って恐い地獄の絵を見ないようにしていた。「人間界に生まれたことは有難いことです。良人行（おこな）いをしないと餓鬼になつて苦しむのです。盆の施餓鬼は誰にも相手にされない施餓鬼に施しをすることです。餓鬼とて苦涯から救われたいのです」。



第二次大戦後の傷痍軍人
(ウィキペディアから転載。原典は毎日新聞社「昭和史第13巻」)

子供心にも僧侶の言葉が重みを持つて響いた。「ねえ、おジイちゃん、悪いことをすると地獄へ行くの?」「そうかもしれないぞ。良い人間になるようにしなくちゃな……」「はい」昭和二十〇三十年代初期の頃、黄色い箱形の西武線で池袋まで行き、そこから

赤羽線に乗り換えるのだが、国鉄の電車の多くが焦げたチョコレートのような色で、何だか暗い感じがした。雨の日などは床に塗った油のせいで、雨水がコロコロ動いていた。電車の中に白い服を着た二人連れが乗って来た。着ている服は着物のような形で、脚にはゲートルを巻き、軍靴を履いていた。一人の男は黒メガネを掛けて白杖を持った盲目の人、もう一人は片腕が無く、鉤爪のような物が付いた義手を付けていた。この鉤爪に箱をぶらさげていて、箱には「南方戦線で負傷」と書いてある。「皆様、先の大戦でこのような姿になりました。働き口も無く、どうぞ御厚情をお願い致します」。乗客は一瞬嫌な顔をするが、それでも箱の中へ十円、百円と金を入れる。二人連れが祖母の前へ立った。「おバアちゃん早くお金入れて……」私は心の中でそう思った。何しろ二人の男が何だかとても恐かった。祖母がお金を入れると「ありがとうどうぞございます」と言つて目の前から居なくなつた。

電車を降りて祖父に訊いた。「あのおじさん達ケガしたの?」「そうさ、はつえのお父ちゃんだってあの人達のようになつたかも知れなかつたさ」「お父ちゃんは背中中に火傷があつて

も、手もあるし目も見えるからね」「そうだよ、戦争で無事だったんだ」「ねえおジイちゃん、戦争で死んだ人は地獄へ行かなかつたよね」「そうさ、お国のために死んだんだ、皆極楽へ行つたと思うよ」。弟たちも「ゴクラク、ゴクラクよかつたね」と言つた。

赤羽線は駅が四つしか無いので、短時間で始発、終点になる。だから「傷痍軍人」が募金をするには好都合な路線だった。山手線などは駅が多いので、車内で募金活動をしていると、すぐにつまみ出されてしまった。今では赤羽線は無くなり、埼京線となり長距離を走るようになった。傷痍軍人には給付金が出されていたが、制度として『戦傷者病者年金』や『軍人恩給』が支給されるには時間がかかった。私の父などは復員間も無い頃からアメリカ資本の会社へ勤められたので幸運だった。

夏の七夕祭りの時にも、この傷痍軍人が白衣姿で街の角に立つて募金をしていた。祭りの時もやはり二人組で、盲目の人が、ハーモニカやアコーディオンで『異国の丘』や『戦友』などの曲を演奏し、義手や義足の人が募金箱を持っているのは電車の中と同じだった。華やいだ祭りの街の中で、この二人が立つ場所だけがポツ



右から私（著者）、下の弟、上の弟。
いつも仲が良かった



私の実家、清水家の墓

カリと異う時空間のように想えた。まるで戦争の空気をまとった亡霊のように、夏の暑さの中でも冷えびえめとしていたのだ。「あんな事して金集めてるけど、国から金が出てるんだ。募金なんかすること無いんだよ！」祭り見物の人の中には、大声で文句を言う人もいたし、アメリカ人などは見て見ぬふりをする人がほとんどだった。昭和三十年代半ば頃でも白衣の人達が街角に立っていたが、その頃になると多くの人達が嫌な顔をして通り過ぎてゆくだけになり、やがて街角からその姿が無くなった。

戦後『戦傷病者友の会』という組織があったが、会が発足した当初は三十五万人ほどの会員数も、平成の終り頃には五千人を切り、解散となった。父達が属していた『軍人恩給友の会』も会員が百歳越えの人達が僅かばかり残るだけとなった。今年には戦後八十年という筋目の年であるが、今を生きる若い世代の人が多くなった。八月になるといつもテレビなどで放送される戦争関連の映像が僅かに当時を伝えるのみとなり、戦後という言葉すら遠のいてゆくばかりだ。私達世代はまだ辛うじて時代の空気を持った人達に囲まれていたので、何となく戦争という言葉

葉が心に刺さるのだ。その後ベトナム戦争などがあったが、ベトナム戦争ですら今年の四月でもう五十年になった。しかし、今もウクライナの人々の身にミサイルやドローンの攻撃が続いている。どこか他人（ひと）事のような反応しか持たない人も多く、テレビで見ると戦死者の家族達の悲しみの姿ですら、一過性の同情程でしかないように思えてならない。ベトナム戦争では特に心に残っていることが多くある。当時は少しのアメリカ兵が残ってはいしたが、基地機能の大半が横田基地へ移り、当地

の基地は自衛隊の活動が大半になっていた。だがベトナム戦中には夜中に大きなアメリカ軍の輸送機が飛来し、夜の空気が重い飛行音が響く。「又か…」と思う日々だった。横田基地だけでは捌ききれない程のアメリカ兵の遺体が、基地内の遺体安置所が一杯になるほど集まっていた。安置所の整備

のバイト代が破格だったので、かなりの若者が飛びついた。しかし一日が二日で辞職してしまう。悪臭もさる事ながら、異様な出来事に遭遇する人が続出したという。中でももっと苛酷だったのは当時の医師たちだった。知り合いのA先生は検死や遺体の修復作業に従事した。アメリカの若者の多くの遺体を目にした彼は、そのあまりの惨（むご）さに、医者を辞めようと思つたという。「国の命令とは言っても、若者達が気の毒でね…」先生のお父様も軍医さんでしたっけ「オヤジはぼくよりもずっと苛酷だったらしいよ。人間なんて愚かなもんだよ…」と嘆いた。

A先生は今でもお元気で、貴重な話をしてくれるが、いつの時代も戦争が止むことが無い。私が子供の頃に遭遇した白衣の傷痍軍人と同じように、戦争で体に傷を負った若者達が世界中に多くいる。戦争で死んでいった人は軍人、民間人の別無く、皆が極楽・天国へ行ったと思いたい。戦争を始めた一部の為政者達は別として…。

「こりゃあ絶景だな」

カワさんこと、川辺さんが手招きする。窓際に来て下を見ると、個室用の露天風呂に女性が入っている。いつもであれば葦簀（よしず）で囲われているのだが、先日の強風で壊れてしまい、修理中だった。

「ド迫力ですね」

カワさんがニヤリと笑って、「おんそらていえいそわか」と口の中で唱えた。

「なんですか、それ」

「おれの田舎に、弁天様が祀られている神社があるんだ。みんなこう言って拜むんだ。霊験あらかたで、御利益があるらしい。意味はわかんねえがな」

グラマラスだが、かなり年増の弁天様である。宴会場の隣の小部屋で、卓上コンロの掃除をしていた。伊豆・熱川の温泉ホテルで働いていた。「内務さん」と呼ばれる雑用係で、食事の運搬から布団の上げ下げ等々、力仕事を担っている。中居は「ルームさん」と呼ばれ、立場も給料も格上だった。

カワさんは、もう三年も全国の温泉ホテルを渡り歩いていそうだ。

長くて半年で次の土地に移動する。

「他の温泉にも入ってみたいからな」

そう言って笑うが、どこかに暗い影がある。逃がっているのかもしれない、と密かに推測している。この

ホテルもそうだが、寮に入れて制服が支給され、三食の賄（まかない）が付いている。身一つで動けるのだ。地方の観光ホテルは、慢性的に人手不足が続いていた。

「この待遇はどうですか？」

以前に訊いたことがある。

鬼の顔

現代御伽草子 103

あきふゆひこ
亜木冬彦

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

「普通だな。飯はまずいけどな」

納得して領いた。従業員の賄は、客の食べ残しのご飯を巨大な保温ジャーに放り込んでいたので、ゴワゴワに変色している。

「おれたちも切り上げるか」

露天風呂から人影が消えていた。

学校が夏休み期間に入ってから初めての週末で、ほぼ満室状態になっ

ていた。

ルームさんが部屋から下げた食器を、運搬用のワゴンに積み込んで、一階の炊事場まで運んでいた。何度も往復する。

（もったいねえな）

特別注文の伊勢海老の焼きグラタンが半分以上残っていた。エレベーターで一人になったときに、手掴みで口の中に入れた。伊勢海老もグラ

（やるか！）

一線を越えるのはわかっていた。逃げ出すことも考えたが、おれにはカワさんのような生き方はできそうにもない。それに、身元がバレているので、田舎の実家に迷惑をかけるかもしれない。かといって、これから一年間、あのゴワゴワの飯を食うのは我慢できない。

（おんそらていえいそわか）

いつの間にか、カワさんに教えてもらったまじないの言葉を唱えていた。

エレベーターの扉が開いた。初老の男が立っていた。嘩然とした。

「文吾！・山本文吾！」

びっくりした。小学校のときの担任だった安西先生だった。先生がおれの顔を見て、笑いながら唇を指さした。手のひらで唇を拭うと、白いタルタルソースが付いていた。涙が溢れだしてきた。

「もしものときのために、田舎の友達にだけは熱川で働いていることを電話で伝えていたんだ。心配した友達が、安西先生に相談した」

文吾さんはそう言って、缶コーヒーを口に運んだ。文吾さんがまだ世間知らずの若者だった頃の話であ



る。

レートの高い賭け麻雀に手を出して、やばい筋の人間に借金をこしらえた。担保に学生証を取り上げられたので、身動きが取れなかった。命じられるままに、熱川の温泉ホテルで働き始めた。一年間無給で働けば、借金をチャラにしてくれるという。

「早く帰れる方法もあるんだぞ」

耳元で囁かれた。ワケアリのカッブルを見つけて、情報を教えてくれという。

「それだけでいいんだ。あとはおれ

達の仕事だ。少しお灸をすえてやる。金になれば、にいちちゃんの借金も早く減る……」

安西先生に問い詰められて、すべて白状した。

「ぶん殴られたよ。怖かった。まさに鬼の形相だったな。賭け麻雀の借金の方は、安西先生が話をつけてくれた。いくらか肩代わりしてくれたのかもしれないが、何も教えてくれないんだ」

空になった缶を弄んでいる。

「安西先生は、戦時中に疎開児童として庄原にやって来たんだ。虱だらけで寝小便垂れだっただけ。ぜんざいを食べさせてもらったときは涙が出たと言っていた。恩返しのために、教師になって庄原の小学校に赴任したんだ。両親は原爆でやられたらしい。自分の故郷は庄原だと言っていたな」

「安西先生が立派な人だということばかりでしたが、それがあの鬼の面となんの関係があるんですか？」

留守番を頼んで郵便局から帰って来たなら、天井近くの壁に髭だらけの大きな鬼の面が飾られていた。

「この前、出雲に行ったときに見つけた。安西先生が怒ったときの顔にそっくりなんだ。おれがまた道を

誤ったら、ガツンと叱ってもらおうと思つてな」

「だったら、自分の部屋に飾ったらいいじゃないですか」

「おまえの恩師でもあるんだぞ」

「『ホトケの安西』しか知らないですよ」

みんなからそう呼ばれていた。

そのとき、店の自動扉が開いて、親子が入って来た。

「絵本を見させてください」

お母さんがそう言って、絵本の棚を物色する。連れの男の子は、小学校に上がるか上がらないかぐらいの年齢だろうか。男の子と文吾さんの視線が交わった。

(やめてくれ……)

文吾さんが親指を突き立てて、ツンツンと天井の方を差している。見上げた男の子の顔が強張って、後ずさりする。たちまち泣き顔になった。



まちの古本屋さん どら書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・ 無料本、百円本、50円本などのコーナー。
 - ・ 地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
- ※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
 - 定休日：毎週日・月・火曜日（5月より日曜日も休みます）
 - TEL: 090(9913)3052
 - 営業時間 9:30～18:30（昼食休憩 12:00～12:30）
- ※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

「旧暦」のカレンダーを見る

古川行洋

第四部 祭事を見る

十月十日 松明あかし(須賀川)

戦国の世の悲運を偲ぶ、須賀川市が全国に誇る伝統行事として知られている。

豊臣秀吉が全国統一に向け九州を



平定し、小田原北条氏へ臣従を求めたところ、東北地方では伊達政宗が南奥羽への勢力を拡大しようとしていた。永禄九(一五六六)年、須賀川城主二階堂盛義は対立していた会津芦名家と和睦し、六歳の盛隆を人質として会津に送った。

天正二(一五七四)年、会津黒川城主芦名盛興の死に伴い、盛隆を請われて芦名盛隆として黒川城主となった。結果、芦名家との関係は一層強固となり二階堂家の威勢が高まった。天正十二(一五八四)年、黒川城主芦名盛隆は二十四歳で家臣に殺害され、家督を継いだ盛隆の子亀王丸が三歳で病死した。その後継として、伊達家からでなく佐竹家から十三歳の佐竹義広を婿として迎えた。

天正十七(一五八九)年六月、伊達政宗二十三歳、芦名義広十五歳、磐梯山の麓、權上原(すりあげはら)で戦い正宗が勝利し芦名家は滅びた。そして、須賀川を支配しようとする二階

堂家の重臣に密書を交わし、策略をめぐらしていた。

須賀川城主は二階堂盛義亡き後、城主として八年に渡りこの地を治めていたのは後室の大乗院であった。大乗院は伊達正宗の叔母であり、正宗は二階堂家の家臣を通して大乗院に和睦するように求めていたが、大乗院は応じない。十月二十一日、大乗院は城内に家臣や村民を集め、伊達家と戦うことを伝えた。

それは、正宗が二階堂家の宿敵を利用して攻めたこと、息子の盛隆が継いだ芦名家を滅ぼしたこと、また自ら降伏することで佐竹家にも攻撃が及ぶ恐れがあり、これまでの恩に報いることが出来ないこと、籠城することを訴えた。「八幡崎・大黒石口」「雨呼口」が決戦場となった。鎌倉時代からこの地を支配していた、二階堂家須賀川城は落城した。大乗院は自害を家臣に止められ、佐竹家に移り、慶長七(一六〇二)年須賀川長祿寺でその生涯を閉じた。

江戸時代、須賀川では十月十日に、この戦で亡くなった人々を弔うため「炬火(きょうか)」を投げ合う行事が行なわれた。この火祭りはその後、幾多の変遷を経て、今では二階堂家の戦死者のみならず、伊達家の戦死

者をも含めての鎮魂の想いと、この行事を守り伝えてきた先人への感謝の気持ちを込めて五老山で行なわれているのである。

十月十日 十日夜(とおかんや)

東日本の収穫祭の一つである。稲の刈り入れが終わり、田の神様が山に帰るのを祭る行事である。また、西日本で行なわれる亥ノ子の祝いに対応して、中部・関東以北の民間では、順暦十月十日に「十日夜」という刈り上げ祝い(収穫祝い)の行事がある。田の神がこの日、山に帰ると言い伝えられ、子供たちが藁で作った鉄砲で地面を叩きながら、「十日夜いいものだ、朝そばぎりに昼だんご、夕飯食ってひっぱたけ」などと唱えて歩く。



ヨーロッパ23日間「卒業旅行」(十)

マック☆ヤマザキ

2月27日火曜日、ミュンヘン。我々の「卒業旅行」はロンドン、パリ、と順調に運び、ドイツ・ミュンヘンに来ていた。今日で日本を出てから11日目にあたる。今日は、学生たちの活動予定は何もなく、自由行動の日である。

それでも、中心地にあるマリエン広場の市庁舎(スケッチ参照)で、11時と12時正午の時報と同時の「からくり時計」は見逃すことのないように伝えておいた。この市庁舎も、



ゴシック様式と言って天空に向かってそびえ立つ特徴を持っている。

からくり時計に見とれている間に、持ち物を狙う輩(やから)がいるので、リュックサック等は背中ではなくおなかの方に抱えるよう、またズボンのお尻のポケットに財布を入れないなど注意しておいた。

からくり人形は等身大の人形で32体あって、オルゴールに合わせて、馬に乗った騎士、ラッパを吹く者、旗を持って行進する騎士も出てくる。

記念写真を撮れば良い思い出になる。カーニバルも今日まで、土産品店は昼から早々に店じまいするので、午前中に買い物を買った。ドバイスした。

私は、下着類の洗濯をして部屋を温風機の近くで乾かしたり、今日までの日報

を仕上げたり、持参している会社からの預かり金の帳簿付け、確認などを終えた。その後、ミュンヘン駅までジョギング。ソーセージ、フライドポテト、ビール、そして「日本経済新聞」を買い入れた。日本円で800円もした。これから先のバスの中で、日本では今こんなことが起こっているとかを伝えるのも私の大切な仕事なのである。

読み終わった新聞は学生達の間で引っぱりだこで、日本ではあまり馴染みのない経済紙を食い入るようにして読んでいた。日本の新聞が海外の駅のキオスクで買えるなんて、日本の経済力、知名度の大きさをあらためて知って、彼らの意気に感ずるところがあれば嬉しい。例えば、その頃のヨーロッパのどの国の入国審査官も赤い表紙の日本のパスポートを見せるだけで、調べもせずに入国させてくれた。パスポートに入国したというバリデーションが押しつけても、残念ではあったが。列の後ろにいた韓国のパスポートの客には細かく質問を重ね、彼らは日本人に甘んじることには不平を漏らしていた。

翌日、朝のうちにロマンチック街道の最南端に当たるノイシュバンシュタイン城(別名白鳥城)を見よ

うと、6時起き。スーツケースのロビー集荷、朝食、日本への電話代等の支払いを済ませて午前7時30分に出発した。

白鳥城へ行く途中は雪が降り積もって吹雪になりバスも徐行、心細い限り。ドライバートのフレディの話では、今回のハリケーン・ストームでヨーロッパ中で86名の人々が亡くなったという。2時間で待望のお城に着いた。夏場は観光バスが多すぎて駐車場にスムーズに入れないくらい混んでいるが、冬でも訪れる観光客は多かった。

駐車場と城とを結ぶシャトルバスが運転を取りやめていた。大木が風のため根こそぎ倒されてお城への道をふさぎ、馬車が辛うじて通れる幅しかない。二頭だての馬車は寒さを防ぐため客席を簡易的に分厚くて透明なビニールで囲ったものだった。

我々は歩くことに決めて馬車と並行してしばらく歩いてみると、突然「ブルーブルー!」という異様な音がするので注意して見ていると、一頭がおならと一緒に中身を噴き出していた。透明で分厚いシートのお尻の真後ろには、そのことを証明する“噴出物”がくっついていていた。

どろくろ俳壇&歌壇

※参加を歓迎します。

河童忌や肝を冷やせと地獄絵図

近藤 昌平

あじさいや牧に育ちし児の寢息

富久光

朝日さす古き石垣草青む

片岡 正人

窓開くカーテンそよぎ半夏生

隆愚

無人駅誰かかけたか鉄風鈴

大槇 三代子

汗ばむや園児の声が大空に

寺内 龍二

朝ぼらけ夫婦でかしましツバクロメ

赤川 冬人

我がの手が切り落とす髪を眺めつつ

松岡 初枝

白くなりしと言う客の声

それぞれ、立春、立夏、立秋、立冬、の前十八日間です。

候のことば

「土用」

隆愚

「土用」と聞くと、「土用丑の日」を思い浮かべる方が多いと想います。その為か、夏のイメージが強いですが、実は、「土用」は年四回あります。

土用の期間は年によって異なります。土用の入りの日によっては、十八日間でない場合もあります。今年の土用の期間は、冬土用・一月十七日から二月二日まで。春土用・四月十七日から五月四日まで。夏土用・七月十九日から八月六日まで。秋土

用・十月二十日から十一月六日まで。

今年の「土用丑の日」は七月十九日と七月三十一日の二回あります。

「土用」は、中国から伝わった「陰陽五行思想」に基づいています。

土用にまつわる行事と風習で、「土用の虫干し」は衣類や本を守る為におこなわれます。「土用干し」は梅干しづくりに欠かせません。「土用三郎」は耳慣れない言葉ですが、その年の豊作を占う事です。夏の土用に入ってから三日目の事で、この日が晴なら豊作、雨だと凶作と言われています。

「ツバメの巣」

赤川 仁洋

今年もツバメが来訪してくれたのだが、なんだか様子がおかしい。去年はシャッターの上部に巣づくりして、雛がたくさん巣立って行った。今年も同じ場所に巣作りするのだと思っていた。

それが、壁際の棚の上部に並べた「宮本百合子全集」の上で巣作りを始めたのだ。天井が近いので、本が剥き出しのまま。函入りだが、その上に泥の巣を作られてはたまらない。段ボールの板をビニールで覆い、全集の上部を保護した。それが気に

入らなかったのか、巣作りは中断。夜になると番(つがい)でシャッターの上部の庇にとまって寝ているのだが、巣作りを再開する気配はない。今年の子育てしないのだろうか……。

6月に入って急に動き始めた。去年と同じシャッターの上に泥や草を運んでくるのだが、それがぼろぼろ床に落ちていく。巣もなかなか形にならないで、見た目も草の茎が垂れ下がっていてボロボロである。今まで見た巣の中でいちばんひどい。去年巣立った子ツバメで、巣作りの経験がないのだろうか。雛の重みに耐えられるのか、今から心配している。



どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

どらくろあ
ホームページ

バックナンバーも掲載して
いるので、ダウンロードして
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

2025 被爆80年 宮角孝雄写真集 「GROUND ZERO LOVE and PEACE」 発刊記念写真展

写真家宮角孝雄が広島原爆ドーム前でポートレートの撮影を始めたのは2000年から。10年目の2010年に「宮角孝雄写真集 GROUND ZERO 希望の神話」を刊行し、今回原爆投下から80年となる2025年に第2弾となる写真集を発刊。世界平和を願う“想い”の共有を、心から願います。

- 旧日本銀行広島支店『2025 平和と美術と音楽と～被爆80周年記念イベント～』内
8月3日(日)～8月6日(水) 10時～17時 (広島市中区袋町5-21)
- 庄原ショッピングセンター『ジョイフル』2階 (TEL0824-72-4111)
7月18日(金)～28日(月)※19日(土) 10時～開会式 (新屋マリライブ!)
- 宮角孝雄サイン会
7月24日(木) 14時～ We 東城店 (庄原市東城町川東1348-1 TEL08477-2-1188)
- 宮角孝雄講演会
7月20日(日) 11時～ 萬福寺 (庄原市是松町227 TEL0824-72-0292)
7月24日(木) 11時～ 天徳寺 (神石郡神石高原町小野749 TEL0847-83-0455)
7月25日(金) 10時～ 「写真を通して語る平和(仮)」(高校生対象)
ほなび (庄原市西本町2-12-10 TEL0824-73-9366)

宮角孝雄プロフィール

広島県庄原市生まれ、被爆2世。庄原格致高校、日本大学卒業。

雑誌やコマースフォトで幅広く活躍。エコール・ド・プロトコール・モナコ写真講師。

編集後記

◇先月6月号の郵送が一通だけ返送。宛名のコピーの糊付けが甘かったのが剥がれてしまったようです。先月号が届いていない方はご連絡ください。あらためて郵送させていただきます。申し訳ございませんでした。

◇梅雨入りしたと思ったらいきなりの猛暑、「中国5県絶景の旅」の取材中で、傘よりも日傘が必要でした。岡山の次は広島で、翌日はしまなみ海道の島を訪れたのですが、夏の気分を早々に味わうことができました。次号でレポートする予定です。

◇今年も折り返しですね。暑い夏になりそうですが、夏バテしないで心も熱く！無理はしないで、がんばります。

発行：どら書房

〒727-0012

庄原市中本町2-1-10

☎090(9913)3052(赤川)

e-mail: touzin@nifty.com

誌面デザイン: ROUTE183

協賛: 九日市愛好会

第285回

くんちいち

ひょうばあ九日市

毎月九日に開催されている街角市場です。発祥は天正年間（1573～1591）、織田信長が安土城を築いたり、豊臣秀吉が大阪城を築いたころ、物々交換の市（いち）として始まりました。その歴史ある市が2001年に復活、地元の出店はもちろん、近隣他県からの出店＆名産品で賑わっています。



7月9日(水)

9:00～13:00

TOPICS(開催場所は裏面の地図参照)

★市民ギャラリー「アート多愛夢」
7月9日(水) 1日のみ 10時～14時
「お茶会(庄原茶道連盟)」

★HONMACHI STAND→コーヒー100円引き

★カフェクラウド タピオカドリンク 100円引き

★どら書房、休憩室(漫画ルーム)あります! ★庄原特別支援学校、お菓子・木工品・手工芸品販売
場所:楽笑座

★坐って休める「お休み処」でのんびり散策を!
テント、机、椅子準備。場所はまちなか広場(雨天、内海宅予定)

★あなたも自分のお店を出してみませんか?(出店者募集中!)

*出店申込みは、【毎月20日締切】 コンパネ1枚スペース1,200円～
九日市愛好会事務局 TEL/FAX(0824)72-8285
〒727-0013 庄原市西本町2-1-10(楽笑座内)

【ホームページ】
<http://www.kunchi-ichi.jp>

